

県内に非常に多くの河川が流れ、生活や産業と密接に関わってきた埼玉県。県の面積に比して河川の延長が長く、利根川・荒川という二大水系をはじめ、中川、元荒川、入間川など多くの中小河川が網の目のように流れています。また、関東平野の低地に位置するため、古くから洪水と向き合ってきた歴史があり、治水や利水の工夫が発達してきました。江戸時代からは見沼代用水や葛西用水などの用水路も整備され、農業や都市生活を支えてきた歴史があります。このように、本県は河川と用水が人々の暮らしと深く関わっており、「川の国」と称される理由でもあります。

本展では、そうした本県の特徴である川と用水の人々とのつながりについて、川絵図を中心に紹介します。

プロローグ 江戸時代はじめの利根川と荒川のように

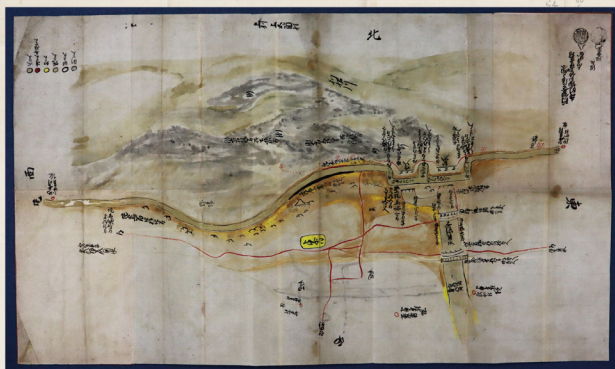


「下総国赤堀川切広之図」(田口(栄)家文書1797)

第2章 母なる川 荒川

埼玉・山梨・長野県境に位置する甲武信ヶ岳を水源とする荒川は、127ある支川を集めながら、埼玉県中央と東京都東部を流れています。流域面積は埼玉県のほぼ3分の2を占め、「母なる川」と呼ばれます。

荒川はその名のとおり「荒ぶる川」でたびたび氾濫し、古来より流域では河川の改修工事を余儀なくされてきました。一方、荒川を利用した舟運により物資が江戸と行き来し、水陸交通の結節点として河岸場や渡船場が各所に設けられました。



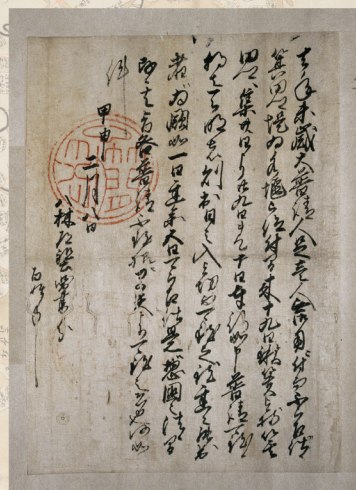
「見沼代用水書上図寛政之頃」(見沼代用水土地改良区文書83)

エピローグ リバーサイドの暮らし

第1章 利根川東遷事業と葛西用水

利根川東遷事業によって、江戸湾から銚子先へと流れを変えた利根川でしたが、銚子方面への水量調整がうまくいかず、たびたび川妻(茨城県五霞町)〜栗橋(久喜市)間で切広げ工事が行われました。また、東遷に伴い武蔵・下総の国境は、古利根川から庄内古川、さらに新たに開削された江戸川へと移りました。

利根川を水源とし、万治3年(1660)、関東郡代伊奈忠克によって開発された葛西用水は、県東部を潤す農業用水として、その後も新田開発が行われるごとに整備されました。見沼代用水とともに、日本三大用水の一つに数えられています。



「北条氏房朱印状(箕田郷堤普請二付)」(道祖士家文書14)

第3章 見沼代用水300年

紀州藩士だった井沢弥惣兵衛為永は、八代將軍徳川吉宗に紀州から呼び寄せられ、新田開発のために江戸に赴任し、灌漑用溜池であった見沼溜井の代替用水路である「見沼代用水」の整備にあたりました。見沼代用水は、現在の行田市付近の利根川から取水され、東縁代用水路は東京都足立区、西縁代用水路は埼玉県川口市に至ります。取水部分である元坎・増坎に始まり、八間堰・十六間堰・柴山の伏越・瓦葺の掛渡井、さらに、東縁及び西縁代用水路と芝川を結ぶ総延長約1,040メートルの閘門式運河である見沼通船堀(国指定史跡)が存在します。

背面:「武蔵国絵図」(堀口家文書1699)[複製展示]

《関連行事》

展示解説(見どころ解説)

日時 令和8年10月20日(火)、12月12日(土) 10時30分〜11時30分
会場 埼玉県立文書館 3階 講座室
参加費 無料
申込 不要(当日先着順、定員60名)

文書館フィールドワーク「見沼代用水を歩く」

さいたま市見沼田んぼの散歩みち⑥「見沼通船堀と水風景コース」を歩く

日時 令和8年11月7日(土)
参加費 保険加入料等が必要となります。要事前申込
対象及び定員 県内在住又は在学の中学生以上 20名 ※詳細は当館HPを御覧ください。



当館HP



「関東川々絵図」(会田家文書8308)[パネル展示]